

虎の色、人の色

小 松 守

(秋田市大森山動物園 園長)



最近のTVコマーシャルで40年近く前に流行った大瀧詠一さんの歌、「君は天然色」のワンフレーズが時々流れている。「～思い出はモノクローム、色をつけてくれ～」、今も色褪せずある名曲だ。作詞家、松本隆さんのこの詩(うた)に込めた真意は詳しく分からないが、ご自身が当時抱いた灰色の気分を変えたいという思いがあったらしい。

コロナパンデミックの今、灰色っぽさがどこか重なる。色は人の気分や心理、さらに社会や時代背景を表すとも言われるが、動物も色の世界とは無縁ではなく、人につながるものがある。色の世界は深く、素人の私には立ち入れない領域だが、曲のワンフレーズにどこか心動かされ、動物と人の色の世界を一寸だけのぞいてみた。

干支のトラ、赤茶色の地毛と黒の縞は子どもでも分かる色模様だ。大森山動物園のトラは雪の降る北方系のアムールトラで、熱帯南方系のベンガルトラなどと比べ色は薄めだ。雪国の秋田美人が色白なのとどこか似ていなくもない。

トラの色模様は生きる森の環境に見事に適応している。同じヒョウ属で形の似る草原性のライオンには縞模様はなく枯草色だ。狩りの仕方も違い、前者は単独性、後者は群れた協力型だ。色模様は動物のくらし環境だけでなく、習性や心理とも深く関係し合う。

私たち人が見るトラの色模様は人の視覚で捉

えたものであり、当のトラや獲物側のシカなどの見え方は人と同じではないようだ。実際にトラやシカになって見ていないので正確ではないが、彼らの視覚は人と同じ鮮やかな天然色ではなく、モノクロームに近い世界で見ているようだ。

明るい太陽光の下で活動する熱帯魚、爬虫類や鳥類など多くの動物は体に豊かな天然色を持つ。裏を返せば色を持つ動物はその色を識別できる細胞を網膜に持っているのだ。変幻自在に色を変えるカメレオン、色鮮やかなインコ類などは豊かな色世界で生きてきたのだろう。

これに対し、ほとんどの哺乳類の体色は地味だ。色で自己アピールするより、目立たない色で身を隠す戦略で生きてきた。多くの哺乳類は薄暗がりや夜の活動が中心である。弱い光しかなくモノクロームに近い状態で見ているのだ。哺乳類がなぜ色の乏しい世界を生きるのかは、哺乳類の生きてきた歴史を振り返る必要がある。

原始の哺乳類が地球上に登場した中生代は、恐竜全盛の時代だった。変温動物とされている恐竜は気温の高い日中に活動し、原始の小型の哺乳類は恐竜が怖いから気温が下がりそれらが寝静まる夜に活動していたと考えられている。光が少ない夜、哺乳類が見る世界は明暗が主のモノクロームであった。乏しい視覚情報を補うため哺乳類は嗅覚や聴覚を発達させ、懸命に生き抜こうとした動物だった。

その後、地球環境は大隕石の地球衝突などで寒冷化が起き、隆盛を極めていた恐竜はその影響で一気に絶滅に向かった。一方、寒冷にも耐える能力を身につけた哺乳類は、恐竜が抜けた地上の生活圏を手に入れ大躍進を始めた。ただ、新生活に入っても視覚世界を特別に発達させることはなかったようだ。

そんなモノクロームの世界に色をつけ、大変革を起こす立役者が現れた。原始のサルだ。哺乳類が誰も進出しなかった新天地、樹上空間への挑戦だった。樹上は地上のように襲われることも少なく、明るい日中にのびのびと暮らすことができた。ただ、地上と違い樹上生活では枝を跳び渡るなど危険も多く、そこでの暮らしを安全にするためには新たな身体能力を様々身につける必要があった。その一つが視力の強化であり、挑戦者には必須であったに違いない。

原始のサルは元々モノクロームの世界に生きていた食虫動物で、明るい日中、虫が集まりやすい赤や黄の花や熟れた果実に接することも多かったと想像できる。やがて虫が集まりやすい果実などを赤や黄として識別する能力を発達させたに違いない。虫と一緒に熟れた甘い果実も味わっただろう。好物の虫、甘い果実、それらは赤や黄の色を持つもの、これが結びつき、色はサルたちを喜ばせ、興奮させる一要因になった。

モノクロームの世界に生きていた原始のサルたちが天然色の世界をつかみ取ったのは、偶然性もあったろうが、新しい世界を切り拓き生きるために払った努力に伴って得たものでもある。新世界への挑戦心がモノクロームに色をつけた原動力だったと言えなくもない。

高等なサルや類人猿は、人と同程度の色覚を持つことが分かっているが、赤や黄に色づき熟

した果実にウハウハと喜び、高揚する。生活場の森は緑の世界、自分達を包み、そして隠してもくれる安心とやさしさを感じる色に思っているだろうし、先が見えない夜の暗闇、黒の世界は恐怖感を覚えるのか、夜は静かに身を縮めたい気分になっている。

赤や黄、緑、黒などに抱くサルたちの態度は人がこれら色に抱く心理とどこか重なっているようで、サルと人の近さを物語る一つとも言える。色は単なる情報ではなく、心模様、感情とも深く関わっていることが分かる。

ところで、色覚を発達させたサルだが、体色は特殊な例を除き他の哺乳類と同じようになぜか地味である。ただ、面白いことにニホンザルやチンパンジーなどは繁殖期に身体の一部を赤桃色に色づかせ、恋のアピールをする。着飾る人の心理と似ている。

太陽と電磁波、光と目、情報と脳認識、モノクロームと色、動物と人、感情と行動、太陽、光は色となり人の心の領域にまで届いている。

やがて高度な文明や文化を築いた人は色を動物とは違う世界で使い発展させた。感情の動物である人は色を単なる情報でなく、精神活動、生活基盤、社会全体で活かしてきた。祭りや儀式、出会いや別れ、喜びや鎮魂、自然や季節、歴史や文化、旅や音楽に至るまで、色は広く薄く、深く濃く、あらゆる場面で活かされている。電気をふんだんに使う現代社会では昼夜問わず絵やモノの色を楽しめるし、光として多様な色を発し、捨て続けている時代でもある。

色は今社会に溢れているが、コロナパンデミックが長く続き、皆でワイワイと色を楽しめない分、気分はどこかモノクロームだ。心も社会も萎えてしまいそうだ。早く色をつけないと。